

聖書：ローマ 1：8～15

説教題：返さなければならない負債

日時：2015年3月15日

パウロは1章7節までにおいて、手紙の差出人、宛先人、初めの祈りを記しました。そして8節から、この手紙の中身に入って行きますが、今日の手紙でもいきなり要件から書く人はいないでしょう。やはり相手についての感謝とか安否を尋ねる言葉を先に書き記すでしょう。当時の手紙もそうだったようです。まずパウロはローマのクリスチャンたちに関する感謝と、彼らを祈りの内にいつも覚えていることを述べます。まず彼が述べている感謝、それは「あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられている」ということです。これはローマのクリスチャンたちの信仰が傑出して素晴らしくて、世界にその名が轟き渡っていたという意味ではありません。彼らの信仰が全世界に伝えられていた大きな理由は、ローマが世界の中心地であったことと関係すると思われる。世界各地から大勢の人々が集まり、たくさんの人々が出て行く場所。そのため、この地にやって来てこの地のクリスチャンたちと出会い、また地方へと出て行ったクリスチャンたちは多くいたのでしょう。その結果、全世界に、ローマにいるクリスチャンたちのニュースは広がっていたのです。

またローマの教会の存在意義は何と言っても、ここが世界帝国の首都であるということです。ローマ皇帝カイザルのお膝元にすでにキリスト者たちの群れが存在していた。これは聞く者にとって大きな励みだったに違いありません。パウロもこのことを喜び、彼らをこのように導き、育ておられる神に感謝しますとまず賛美と栄光を神に帰しているのです。

また彼は、あなたがたのためにいつも祈っていること、あなたがたのことを思わぬ時はないという自分の心をあかししています。彼は神がこのことをあかししてくださいと強調しています。13節にも同じような調子の言葉が出て来ます。「兄弟たち。ぜひ知っておいていただきたい」。なぜパウロはここまでローマのクリスチャンたちのことを思う自分を証ししなければならなかったのでしょうか。それは背後に、パウロは異邦人世界への使徒なのに、なぜいつまで経ってもローマに来ないのかというやや批判的な考えを持つ人たちがいたのかもしれませんが。そこでパウロは、私は祈るたびにいつもあなたがたのところに行けるようにと願っている、神の御心によって今度こそは道が開かれてそうなるように祈っている、と述べます。なぜ、そう願いつつもこれまでかなわなかったのかということについては13節でもう少し述べられます。しかしパウロは彼らのことをいつも思い、彼らに会いたいと願い続けて来た自分であることをまず証ししています。

ではなぜパウロはローマに行きたいと願っているのか、その目的が11節以降に記されます。11節：「私があなたがたに会いたいと切に望むのは、御霊の賜物をいくらかでもあなたがたに分けて、あなたがたを強くしたいからです。」 「御霊の賜物を分ける」と聞くと、パウロはたくさん御霊の賜物を所有していて、自由にそのいくらかを他人に分配することができたかのように思うかもしれません。しかしそのようなことができるのは三位一体の神様だけです。ここの意味はパウロが自分に与えられた聖霊の賜物によってローマ人の間で奉仕することにより、彼らの祝福と益に仕えたいということであると思われます。特にその中心は福音を伝える働きによってということだと思われま

す。しかし彼はすぐに12節の言葉を付け加えます。「というよりも、あなたがたの間にいて、あなたがたと私との互いの信仰によって、ともに励ましを受けたいのです。」パウロはローマに行って、ただ自分がその兄弟姉妹に一方的に何かを与えるのではないということを言っています。「私もともに励ましを受けたいのです。私もあなたがたを通して霊的な祝福をいただきたいと願っているのです。」と。すなわち相互的な励ましです。ここに「あなたがたと私との互いの信仰によって」とあります。パウロはまだローマのクリスチャンたちと会ったことがありませんが、お互いはそれぞれ神から同じ信仰を頂いています。その信仰は同じ神から出ている一つの信仰です。その同じ信仰を持つ者同士がともに交わる時、そこには信仰の相互作用が生じて、両者が励まされることに至る。まず一致の内に私たちは励ましを受けます。これまで知らなかった人との間にも、神によって同じ信仰が与えられていることを知る時、私たちは大いに励まされるのです。相手の信仰に接して、神のみわざを生き生きと感じ、また神について新しく教えられ、励ましを受け、勇気を与えられるということが起こります。またその交わりには、一致だけでなく、多様性もあります。それぞれに与えられている賜物の違いや個性があります。それらを通して神の光が輝き現れています。その多様性に触れることによって、私たちは豊かな助けや支え、力づけを頂くことにもなります。パウロは自分が使徒だから、ローマのクリスチャンたちから何も受けるものはないというスタンスは取りませんでした。彼自身、ローマに行って、その地の兄弟姉妹との信仰の交わりを通して、ともに励ましを受けることを楽しみにし、また期待していました。私たちもそのように相手がどんな信仰者でも、その交わりから互いに学び合い、ともに励ましを受けることができるのです。もちろん私たちはいまだ聖化の途中にある者たちであって、欠けている部分、罪のしみの残っている部分が多くあるでしょう。そのため、嫌な思いをしたり、がっかりすることもないわけではありません。しかし相手が神によって信仰を与えられた信者なら、その交わりから「ともに励ましを受ける」ことができるのです。神はそのように信仰の相互作用を通して、私た

ちがともに励まされ、力づけられることを御心としておられます。私たちは益々与えられている交わりを尊んで、パウロのようにこのことにおける祝福を求めて行くべきではないでしょうか。

パウロは 13 節でなお弁明の言葉を述べます。「私は何度もあなたがたのところに行こうとしたのですが、今なお妨げられているのです」と。参考になるのは、後の 15 章 22 節の言葉です。「そういうわけで、私は、あなたがたのところに行くのを幾度も妨げられましたが・・・」。前後を読むと分かるのは、パウロはエルサレムからイルリコに至るまで福音を伝えるのに忙しくしていた。すなわち東地中海の伝道に専心していた。そしてこの時も、愛の献金を持ってエルサレムの貧しい聖徒たちを助けるために赴かなければなりません。ユダヤ人の教会と異邦人の教会の一致を確かなものにするためです。しかしそれが終わればいよいよ導かれてローマに赴きたいとパウロは考えて、この手紙を書いています。パウロはここで「他の国の人々の中で得たと同じように、あなたがたの中でもいくらかの実を得ようと思って」と言っています。これは実質的には 11 節の内容と同じでしょう。特に福音宣教の奉仕を通して、神が結ばせてくださる実を刈り取るわざに仕えさせていただきたい。それは一つにはさらに回心者が与えられるということでもあり、またすでに信仰を持っていた者たちが、より強められるということでもあったでしょう。

最後にパウロはこのように全世界に出て行って福音を伝えようとする自分の動機について 14～15 節で語っています。14 節の「ギリシヤ人にも未開人にも」、また「知識のある人もない人にも」という組み合わせによって、どちらも全世界のすべての人を指しています。パウロはその人々に「返さなければならない負債」を負っていると言います。これはどういう意味でしょうか。彼が神に負債を負っているというなら分かります。パウロは以前、キリスト教会の迫害者でした。主の弟子を見つけては縛り上げ、エルサレムに引いて来て、牢屋におち込み、その命を断つことにまで関わりました。そんな彼はダマスコ途上で復活の主に出会い、自分がそれまで神に対する恐ろしい反逆の道を歩んで来たことを悟ります。しかし彼は滅ぼされなかったばかりか、主によって救われ、さらには主の御国を建て上げるための器として立てられた。この経験を通してパウロが自分は神に大変な負債を負っていると考えても不思議ではありません。私は神に返さなければならない大きな負債を負っています、と言うのなら理解できます。

ところが彼はここで、「私はギリシヤ人にも未開人にも、知識のある人にも知識のない人にも、すなわち世界のすべての人に負債を負っている」と言いました。これはどういうことでしょうか。負債という言葉には二つのイメージがあると考えられます。一つは借金のイメージです。私が A さんから 100 万円を借りたら、私は期日までに A

さんに 100 万円返さなければならない負債を負っていると言います。こういう意味ではパウロはもちろん人々に負債を負ってはいません。彼はローマのクリスチャンたちにまだ会ったこともありませんから、お金を借りたこともありませんし、何らかの世話になったことも直接的にはありません。まして全世界のすべての人々に対してはそうです。しかし負債というイメージはもう一つの状況でも使われます。それは例えば私がAさんからBさんに渡すようにと 100 万円をあずけられたような場合のことです。私はBさんから直接お金を借りたわけではありませんが、Bさんに渡すべき 100 万円を持っています。それがまだ私の手にある間は、私はBさんに返さなければならない負債を負っている、Bさんのものであるべきものを私が持ったままの状態にあるという状況が発生していることとなります。パウロが言っているのはこちらの意味でしょう。

パウロも私たちも、まず神に対して深く負っている者です。返し切れないほどの負債を神に対して負っています。負債と言うとマイナスのイメージを持つかもしれませんが、ここで言っている負債は、神の愛に心から感謝して、何かお返しせずにはいられないという気持ちとセットになっているものです。パウロはⅡコリント 5 章 14 節で「というのは、キリストの愛が私たちを取り囲んでいるからです」と言いました。この「キリストの愛が取り囲んでいる」とは、「キリストの愛が私たちに強く迫っている」とか「私たちを駆り立てている」という意味の言葉です。キリストの愛に接したら、私たちはまさにキリストの愛によって強いられずにいません。キリストのために、私のすべてをささげて仕えて歩む者でありたいと。神の愛が本当に分かった人はそうなるのです。神に深く負うている自分、返し切れない負債を負っている自分。その恵みに感謝して歩みたい、と。

しかしその神は私たちにこう言われるのです。「あなたがわたしに応答するというなら、わたしが求めているすべての人々に福音を携え行くことに現わせ」と。「そのために、わたしはあなたにまず先に福音を授けたのだ」と。では私たちは誰に福音を持ち運べば良いのでしょうか。Ⅰテモテ 2 章 4 節：「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。」すなわち全世界のすべての人々です。そういう意味からすると、私たちもまた全世界のあらゆる人々に返さなければならない負債を負っている者であるということになります。パウロは 15 節で「ですから、私としては、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を伝えたいのです。」と述べています。

確かにパウロは特別な意味で、この働きに召された器です。彼は使徒ですが、私たちは全く同じ意味で使徒ではありません。しかし根本的には同じです。私たちも神の大きな恵みを頂いた者たちであり、神に対して返し切れない感謝という負債を負っている者です。私たちはそれをどのように返して行くべきでしょうか。それはやはり、

私たちの周りの人々に福音を持ち運ぶことによってでしょう。福音は決して私物化して良いものではないのです。私たちのところで止めてしまって良いものではないのです。それは一人占めにして保っていて良いものではなく、分かち合うべきものとして私たちに託されています。ですから私たちはこれを神が渡すようにと意図しておられる人のところまで行って、確実に手渡さなければならない。私たちにとってそれはまず、私たちと近い関係にある人たちでしょう。私たちの家族、友だち、地域に。そして神は全世界を求めておられることを思うなら、広く全世界に目を上げて、遠くの人のためにも、地球の反対側で必要を覚えている方々のことも覚え、できることをして行くべきでしょう。

今日、覚えたいことは、私たちも「すべての人に返さなければならない負債を負っている」と表現されるほどに、神からの大きな恵みを頂いている者たちであるということです。私たちの周りにいる人、出会う人、知り合う人すべてに、このような「負い目」を感じるべき者たちです。私たちは祈りをもって、私たちの言葉と行ないをもってこの福音を届けることができるように。この福音の光を私を通して輝かせることができるように。そして人々の救いに仕えることができるように。この週の私たちの行くところ、遣わされるところで、神への感謝を、このような生き方に現わし、すべての人を求めておられる神の小さな一つの手足として、神に用いていただく歩みへ進みたいと思います。